

神戸市（新長田地区）中心市街地活性化基本計画について

神戸市産業振興局商業課

1. はじめに

神戸市は人口153万人を擁する政令指定都市であり、古くは奈良時代の「大輪田泊」として歴史に表れ、慶応3年（1868年）の開港以来、国際港湾都市としての地位を築いてきた。平成7年の阪神・淡路大震災では甚大な被害を蒙り、今もその傷痕は残るが、近隣都市はもとより国内外からの温かい支援をいただき、ここまで復興することができた。心より感謝申し上げます。未曾有の震災を経験した都市として、安全・安心のまちづくりを進めるとともに、震災の教訓を広く発信する役割を担っていきたい。



2. 策定の経緯

まず、タイトルに（新長田地区）とあることにお気づきいただけたらでしょうか。通常、中心市街地は1つの都市に1箇所と考えられるが、150万市民が暮らす本市においては、従来から複数の中心（都市核）が必要と考え、それぞれ異なる機能を担う東部・中部・西部の三つの都市核を定め、それらが相互に連携することで都市全体を支えるまちづくりを進めてきた。

内閣府との協議の際、「中心市街地は複数存在しており、西部の新長田で特に活性化が必要である」というまちづくりの考え方をまず説明する必要があったが、政令市からの相談は当時少なかったこともあり、手探り状態であった。ようやく協議がまとまり、申請する段になって、「神戸市中心市街地（新長田地区）」が正式な名称となった。タイトルの（ ）は、「1つの都市に中心市街地が複数ある」という意味である。

3. 計画の特色

本市の基本計画で特徴的なのは、復興事業による都市基盤の再生から、その次の段階に進むための活性化を目指す、すなわち、震災による「マイナスからゼロへ」の復興の枠組みを超えて、神戸市西部の都市核としてより高度な機能をそなえたまちを目指すという点にある。したがって、ハード整備よりも、現在完成しつつあるストックをいかに活用するか、住民主体のまちづくりをどこまで展開できるかといった、ソフト面での取り組みが重要となってくる。

4. 現況分析

○産業～特定の産業に頼った地域活性化の限界

地場産業を基盤として発展してきた当地域において、地場産業である製造業全般で事業所数・従業員数が減少し、まちの活力低下を招いている。ケミカルシューズなどの産業に特化した支援による産業振興を進めたが、地域全体の活性化には至らなかった。既存のものづくり産業の高度化とともに、新しいものづくり産業の振興と、新たな担い手の育成にも取り組む必要がある。

○商業～ストック施策先行と住民ニーズ取り込みの遅れ

市内有数の商業集積が震災で失われたため、商業ストックの早期回復を主眼として取り組んだ。その結果、折からの消費不況もあり、供給は充足したが需要が追いつかず、空き床・空き店舗が生じている。賃料設定等各種テナント誘致策による店舗の充実と、新住民の呼び込み、新規顧客開拓などのソフト面での対策が必要である。

○集客～まちの賑わいのイメージの核となる集客力の不足

歩行者通行量が減少しており、かつてのような賑わいがまちに戻っていない。他の都市核と比べて神戸の顔となるような観光施設がなく、来街者がまちを楽しめる仕掛けが不足しているため、集客力が弱い。新たなまちのイメージをつくり、観光都市神戸の底上げを図るため、魅力ある地域資源の発掘と活用が必要である。

5. 計画の概要

○計画区域 113.4 ha

○計画期間 平成 20 年度～平成 24 年度

○中心市街地活性化の基本方針

「人が集い、交流する、賑わいあるまち・新長田」

○中心市街地活性化の目標

①ものづくりのまち・長田の再生

②賑わいある商業空間づくり

③個性的な集客拠点づくり

○数値目標 (H24)

①中心市街地内の事業所数：1,600 事業所

②中心市街地内の年間小売販売額：290 億円

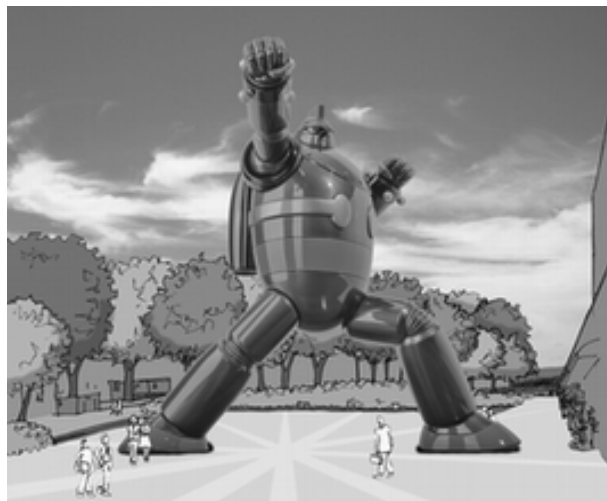
③中心市街地内の歩行者通行量 (休日)：42,400 人

6. 主な事業

計画には 51 事業を記載しているが、ここでは主なものを紹介する。

○KOBE 鉄人 PROJECT

神戸出身の漫画家、故・横山光輝氏にちなんだ事業で、復興とまちづくりのシンボルとして実物大(18 m)の鉄人 28 号モニュメントをまちの玄関口に建設し、新たな集客拠点として来街者を呼び込み、賑わいづくりに寄与する。また、地域南部に三国志オブジェ・三国志ミュージアムを整備し、地域全体の回遊性を高める。



鉄人 28 号モニュメントイメージ



(仮称) 三国志ミュージアム

○商店街アーケード整備事業

鉄人モニュメント建設と合わせて、まちの玄関口にあたる商店街のアーケードを整備し、快適な歩行者空間を整備する。まちのモール化が完成することで、来街者の回遊性を高め、賑わい効果を地域内に波及させる。

○食のまち推進事業

お好み焼き・そばめしなどの粉もん、ほっかけといった下町の食文化を活かし、魅力ある飲食店の集積や新商品の開発を行う。



○アジアをテーマにした賑わい拠点の整備

新長田にはアジア・沖縄系住民のコミュニティが存在し、独自の文化を形成している。個性的な店舗の集積や交流イベントの開催によって、草の根レベルの賑わい・交流拠点を目指す。



7. おわりに

計画が認定された際、地元の会合で、「これは到達点ではなく、新しいスタートに立ったという気持ち」「やり遂げなければという重圧感よりも、とことん利用してやろうという意気込み」を持ってほしいと訴えた。新長田には50年に及ぶまちづくりの歴史があり、そこに暮らす人々は皆おおらかで温かく、そしてエネルギーである。まだまだ難問は山積しているが、ともに手を携え、まちの活性化を目指していきたい。